殺菌消毒薬（特殊絆創膏を含む）

製品群No. 54　ワークシートNo.34

	リスクの程度の評価		A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景（既往歴、治療状況等）（重篤な副作用につながるおそれ）		F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ）		G 使用方法（誤使用のおそれ）			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
	評価の視点		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与（投与により障害の再発・悪化のおそれ）	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する（適応を誤るおそれ）	使用方法（誤使用のおそれ）			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
				併用禁忌（他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ）	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
殺菌消毒成分	アクリノール	アクリノール液	グラム陽性、陰性菌に有効で、特に連鎖球菌、ウェルシュ菌、ブドウ球菌、淋菌に対し、静菌及び殺菌作用がある。作用機序は、生体でアクリジニウムイオンとなり細胞の呼吸酵素を阻害するといわれている。					頻度不明（塗布部の疼痛、発赤、腫脹等潰瘍、壊死）	頻度不明（過敏症）							・大量服用時には、悪心、嘔吐、腹痛、下痢、肝機能障害 ・外用にのみ使用し、内服しないこと			0.05～0.2w/v%の液として使用する。	化膿局所の消毒、泌尿器・産婦人科術中術後、化膿性疾患（せつ、よう、扁桃炎、副鼻腔炎、中耳炎）
殺菌消毒成分	エタノール	消毒用エタノール＜ヤクハン＞、OTCとして使用されているのは「消毒用エタノール」と同じ濃度	本剤は、使用濃度において栄養型細菌（グラム陽性菌、グラム陰性菌）、酵母菌、ウイルス等には有効であるが、芽胞（炭疽菌、破傷風菌等）及び一部のウイルスに対する殺菌効果は期待できない。エタノールの殺菌力上の最適濃度については、その試験方法により一定しないが、通常70%と称してよく、この濃度においては皮膚に対して拡散及び揮発性も適度で、表皮を損傷することもなく、無害である。					頻度不明（刺激症状）	頻度不明（過敏症）		損傷皮膚及び粘膜（刺激）					・経口投与しないこと ・過量投与：全身の熱感、味覚・嗅覚機能の低下、顔面紅潮、発汗、悪心、嘔吐、急性胃炎、マロリーワイス症候群、口渇、利尿、痛覚閾値の上昇、呼吸促進、心悸亢進、血圧下降、多幸感、酩酊、身体失調、歩行困難、急性アルコール性ミオパチー、記憶障害、感情不安定、代謝性アシドーシス、低血糖、体温低下、脱水、失禁、肝機能障害、呼吸抑制、昏睡（エタノールの血中濃度が0.4～0.5%で呼吸停止が起こる）、催眠剤との同時服用や頭部外傷の合併にも注意する。	・同一部位に反復使用する場合には、脱脂等による皮膚荒れを起こすことがある ・広範囲又は長期間使用した場合には、蒸気の吸入に注意する		本品をそのまま消毒部位に塗布する。	手術・皮膚の消毒 ・手術部位（手術野）の皮膚の消毒 ・医療用具の消毒

殺菌消毒薬（特殊絆創膏を含む）

製品群No. 54

ワークシートNo.34

	リスクの程度の評価		A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 盗用のおそれ	E 患者背景（既往歴、治療状況等）（重篤な副作用につながるおそれ）		F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ）		G 使用方法（誤使用のおそれ）			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
	評価の視点		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与（投与により障害の再発・悪化のおそれ）	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する（適応を誤るおそれ）	使用方法（誤使用のおそれ）			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
				併用禁忌（他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ）	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
殺菌消毒成分	塩化ベンザルコニウム	0.1w/v%チアミトール水	・本剤は使用濃度において、栄養型細菌（グラム陽性菌、グラム陰性菌）、真菌等には有効であるが、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は						頻度不明（過敏症）		粘膜、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと					・原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する（刺激性がある）。・炎症または易刺激性の部位（粘膜、陰股部等）への使用：正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい。また、使用後は滅菌精製水で水洗する。・深い創傷または眼に使用する希釈水溶液は、調製後滅菌処理すること。・経口投与しないこと。浣腸には使用しないこと。・密封包帯、ギプス包帯、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。	・粘膜、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと（全身吸収による筋脱力を起こすおそれがある）。			効能・効果：用法・用量（塩化ベンザルコニウム濃度）①手指・皮膚の消毒：通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落とした後、塩化ベンザルコニウム0.05～0.1%溶液に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で清拭する。術前の手洗の場合には、5～10分間ブラッシングする。②手術部位⑧結膜嚢の洗浄・消毒 塩化ベンザルコニウム0.01～0.05%溶液を用いる。・炎症または易刺激性の部位（粘膜、陰股部等）への使用：正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい	

殺菌消毒薬（特殊絆創膏を含む）

製品群No. 54

ワークシートNo.34

	リスクの程度の評価		A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C′ 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景（既往歴、治療状況等）（重篤な副作用につながるおそれ）		F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ）		G 使用方法（誤使用のおそれ）			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
	評価の視点		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与（投与により障害の再発・悪化のおそれ）	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する（適応を誤るおそれ）	使用方法（誤使用のおそれ）			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
				併用禁忌（他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ）	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
殺菌消毒成分	塩化ベンゼトニウム	ハイアミン液：塩化ベンゼトニウム10w/v%	芽胞のない細菌、真菌類に広く抗菌性を有し、グラム陽性菌には陰性菌よりも低濃度で効果を示す。一方、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない						頻度不明（過敏症）							・原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する。・炎症または易刺激性の部位（粘膜、陰股部等）への使用時は低濃度・経口投与しないこと。・密封包帯、ギプス包帯、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。 ・深い創傷又は眼にしようする場合の希釈液は注射用蒸留水か滅菌精製水を使用	全身吸収による筋脱力をおこすおそれがあるので、粘膜、創傷面又は炎症部位に長期間又は広範囲に使用しない。		①通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落した後、塩化ベンゼトニウム0.05～0.1%溶液（本剤の100～200倍希釈液）に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で清拭する。術前の手洗の場合には、5～10分間ブラッシングする ②手術前局所皮膚面を、塩化ベンゼトニウム0.1%溶液（本剤の100倍希釈液）で約5分間洗い、その後塩化ベンゼトニウム0.2%溶液（本剤の50倍希釈液）を塗布する ③塩化ベンゼトニウム0.01～0.025%溶液（本剤の400～1,000倍希釈液）を用いる ④塩化ベンゼトニウム0.01%溶液（本剤の1,000倍希釈液）を用いる ⑤塩化ベンゼトニウム0.025%溶液（本剤の400倍希釈液）を用いる ⑥塩化ベンゼトニウム0.02%溶液（本剤の500倍希釈液）を用いる ⑦塩化ベンゼトニウム0.1%溶液（本剤の100倍希釈液）に10分間浸漬するか、または厳密に消毒する際には、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンゼトニウム0.1%溶液（本剤の100倍希釈液）中で15分間煮沸する ⑧塩化ベンゼトニウム0.05～0.2%溶液（本剤の50～200倍希釈液）を布片で塗布・清拭するか、または噴	①手指・皮膚の消毒 ②手術部位（手術野）の皮膚の消毒 ③手術部位（手術野）の粘膜の消毒、皮膚・粘膜の創傷部位の消毒 ④感染皮膚面の消毒 ⑤膣洗浄 ⑥結膜のうの洗浄・消毒 ⑦医療用具の消毒 ⑧手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒
殺菌消毒成分	オキシドール	オキシドール	殺菌消毒作用：使用濃度において栄養型細菌に対して殺菌作用を示すが、その作用は緩和で持続性がない。発泡による機械的清浄化作用がある。			空気塞栓		連用：口腔粘膜刺激			瘻孔、挫創等本剤を使用した際に体腔にしみ込むおそれのある部位					易刺激性の部位に使用する場合には、正常の部位に使用する場合よりも低濃度とする。深い創傷に使用する場合の希釈液としては注射用水か滅菌精製水を用い、水道水や精製水を用いない。外用にのみ使用し、内服しないこと	長期間又は広範囲に使用しないこと		(1)原液のままあるいは2～3倍希釈して塗布・洗浄する。 ②原液のまま塗布、滴下あるいは2～10倍（耳科の場合、時にグリセリン、アルコールで希釈する）希釈して洗浄、噴霧、含嗽に用いる。 ③原液又は2倍希釈して洗浄・拭掃する。 ④10倍希釈して洗口する。	①創傷・潰瘍の殺菌・消毒 ②外耳・中耳の炎症、鼻炎、咽喉頭炎、扁桃炎等の粘膜の炎症 ③口腔粘膜の消毒、齲窩（うか）及び根管の清掃・消毒、歯の清浄 ④口内炎の洗口

殺菌消毒薬（特殊絆創膏を含む）

製品群No. 54

ワークシートNo.34

	リスクの程度の評価		A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景（既往歴、治療状況等）（重篤な副作用につながるおそれ）		F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ）		G 使用方法（誤使用のおそれ）			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
	評価の視点		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与（投与により障害の再発・悪化のおそれ）	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する（適応を誤るおそれ）	使用方法（誤使用のおそれ）			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
				併用禁忌（他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ）	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
殺菌成分	クレゾール	クレゾール石ケン液「ヤクハン」：クレゾール石けん液を使用した	薬理作用や毒性はクレゾールとほぼ同様で、その殺菌力は使用した原料によって多少異なる。本剤は使用濃度において抗酸菌を含む通常の細菌には有効であるが、芽胞および大部分のウイルスに対する殺菌効果はほとんど期待できない。						頻度不明（過敏症）		損傷皮膚					・適量投与（16mL 未満服用時）悪心、嘔吐、下痢、口腔・食道・胃粘膜の腐食に伴う灼熱感と疼痛、粘膜白色変性、咽頭・喉頭浮腫、上気道の狭窄、頭痛、めまい、（16mL 以上服用時）吐血、食道潰瘍、下血、痙攣、筋線維性攣縮、腱反射消失、せん妄、興奮、不穏、瞳孔縮小、体温低下、代謝性アシドーシス、メトヘモグロビン血症、貧血、溶血、血圧低下、チアノーゼ、心筋炎、不整脈、ショック、呼吸麻痺、肺水腫、昏睡、心停止、肝障害、腎障害（急性尿細管壊死による）。・皮膚に付着した場合、白色または茶褐色の化学熱傷を認める。　・経口投与しないこと・眼に入らないようにすること・希釈する水にアルカリ土金属塩、重金属塩、第二鉄塩、酸類が存在する場合、変化することがある。常水で希釈すると次第に混濁して沈殿を生ずることがあるが、このような場合は上澄み液を使用。	長期間又は広範囲に使用しないこと			①クレゾールとして0.5～1%（クレゾール石ケン液として1～2%）②クレゾールとして1.5%（クレゾール石ケン液として3%）③クレゾールとして0.1%（クレゾール石ケン液として0.2%）炎症又は易刺激性の部位に使用する場合には、正常の部位に使用するよりも低濃度とする	①手指・皮膚の消毒　手術部位（手術野）・皮膚の消毒医療用具の消毒　手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒　②排泄物の消毒　③壁の洗浄

殺菌消毒薬（特殊絆創膏を含む）

製品群No. 54　　ワークシートNo.34

	リスクの程度の評価		A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景（既往歴、治療状況等）（重篤な副作用につながるおそれ）		F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ）		G 使用方法（誤使用のおそれ）			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
	評価の視点		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与（投与により障害の再発・悪化のおそれ）	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する（適応を誤るおそれ）	使用方法（誤使用のおそれ）			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
				併用禁忌（他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ）	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
殺菌消毒成分	塩酸クロルヘキシジン	グルコン酸塩として：5%ヒビテン液	抗菌作用（in vitro試験）・広範囲の微生物に作用し、グラム陽性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。・グラム陰性菌には比較的低濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力に幅がみられる。・芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。・結核菌に対して水溶液では静菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。・真菌類の多くに抗菌力を示すが、全般的に細菌類よりも抗菌力は弱い。・ウイルスに対する効力は確定していない。 作用機序：作用機序は十分には解明されていないが、比較的低濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的漏出や酵素阻害を起こし、比較的高濃度では細胞内の蛋白			ショック(0.1%未満)		0.1%未満（過敏症）		・クロルヘキシジン製剤過敏症の既往歴　・脳、脊髄、耳（内耳、中耳、外耳）（聴神経及び中枢神経に対して直接使用した場合は、難聴、神経障害を来すことがある。）・膣、膀胱、口腔等の粘膜面（ショック症状の発現が報告されている。）・産婦人科用（膣・外陰部の消毒等）、泌尿器科用（膀胱・外性器の消毒等）には使用しない。・眼に使用しない	・薬物過敏症の既往歴　・喘息等のアレルギー疾患の既往歴、家族歴				・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。・外用にのみ使用する。・眼に入らないように注意する。			本品は下記の濃度（グルコン酸クロルヘキシジンとして）に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。 効能・効果　用法・用量：①手指・皮膚の消毒　0.1～0.5%水溶液（本剤の50倍～10倍希釈）（通常時：0.1%水溶液（30秒以上）　汚染時：0.5%水溶液（30秒以上））②手術部位（手術野）の皮膚の消毒　0.1～0.5%水溶液（本剤の50倍～10倍希釈）又は0.5%エタノール溶液（本剤の10倍希釈）（0.5%エタノール溶液）③皮膚の創傷部位の消毒　0.05%水溶液（本剤の100倍希釈）（0.05%水溶液）④医療用具の消毒　0.1～0.5%水溶液（本剤の50倍～10倍希釈）又は 0.5%エタノール溶液（本剤の10倍希釈）（通常時：0.1%水溶液（10～30分）汚染時：0.5%水溶液（30分以上）緊急時：0.5%エタノール溶液（2分以上））⑤手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒　0.05%水溶液（本剤の100倍希釈）（0.05%水溶液）	

殺菌消毒薬（特殊絆創膏を含む）

製品群No. 54　ワークシートNo.34

	リスクの程度の評価		A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景（既往歴、治療状況等）（重篤な副作用につながるおそれ）		F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ）		G 使用方法（誤使用のおそれ）			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
	評価の視点		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与（投与により障害の再発・悪化のおそれ）	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する（適応を誤るおそれ）	使用方法（誤使用のおそれ）			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
				併用禁忌（他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ）	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
殺菌消毒成分	ポビドンヨード	イソジンスクラブ（75mg/mL）液剤	抗殺菌作用、抗ウイルス作用を有する				ショック、アナフィラキシー様症状(0.1%未満)	0.1%未満（接触性皮膚炎、そう痒感、灼熱感、皮膚潰瘍、血中甲状腺ホルモン値（T3、T4値等）の上昇あるいは低下などの甲状腺機能異常）、新生児に使用し、一過性の甲状腺機能低下を起こしたとの報告	0.1%未満（過敏症）			本剤又はヨウ素に対し過敏症の既往歴、甲状腺機能に異常、妊娠中・授乳中の婦人（長期・広範囲）				損傷・創傷皮膚及び粘膜には使用しないこと。経口投与しないこと	妊娠中及び授乳中の婦人には、長期にわたる広範囲の使用を避けること		手指・皮膚の消毒：本剤の適量を用い、少量の水を加えて摩擦し、よく泡立たせたのち、流水で洗う。手術部位（手術野）の皮膚の消毒：本剤を塗布するか、または少量の水を加えて摩擦し、泡立たせたのち、滅菌ガーゼで拭う。	手指・皮膚の消毒、手術部位(手術野)の皮膚の消毒
砂金消毒成分	ポビドンヨード	イソジン液（100mg/mL）液剤	抗殺菌作用、抗ウイルス作用を有する				ショック、アナフィラキシー様症状(0.1%未満)	0.1%未満（接触性皮膚炎、そう痒感、灼熱感、皮膚潰瘍、血中甲状腺ホルモン値（T3、T4値等）の上昇あるいは低下などの甲状腺機能異常）、本剤を新生児に使用し、一過性の甲状腺機能低下を起こしたとの報告、ポビドンヨード製剤を膣内に使用し、血中総ヨウ素値及び血中無機ヨウ素値が一過性に上昇したとの報告、本剤を妊婦の膣内に長期間使用し、新生児に一過性の甲状腺機能低下があらわれたとの報告、ポビドンヨード製剤を膣内に使用し、乳汁中の総ヨウ素値が一過性に上昇したとの報告	0.1%未満（過敏症）		本剤又はヨウ素に対し過敏症の既往歴	甲状腺機能に異常、重症の熱傷、妊娠中・授乳中の婦人（長期・広範囲）				経口投与しないこと。深い創傷に使用する場合の希釈液としては、注射用水か滅菌水を用い、水道水や精製水を使用しない。石けん類は本剤の殺菌作用を弱めるので、石けん分を洗い落としてから使用すること。	妊娠中及び授乳中の婦人には、長期にわたる広範囲の使用を避けること。大量かつ長時間の接触によって接触皮膚炎、皮膚変色があらわれることがある		手術部位(手術野)の皮膚の消毒、手術部位(手術野)の粘膜の消毒：本剤を塗布する。 皮膚・粘膜の創傷部位の消毒、熱傷皮膚面の消毒、感染皮膚面の消毒：本剤を患部に塗布する。	手術部位(手術野)の皮膚の消毒、手術部位(手術野)の粘膜の消毒、皮膚・粘膜の創傷部位の消毒、熱傷皮膚面の消毒、感染皮膚面の消毒